

氏名	齋藤 功司
ヨミガナ	サイトウ コウジ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博美第628号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 芸術的知性－美術教育の再指定 〈作品〉 フルビネクの声帯・曾祖父の眼球

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津 文哉
（論文第1副査）	東京藝術大学	名誉教授		上野 浩道
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	渡邊 五大
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		佐藤 一郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠

（論文内容の要旨）

本論文は、芸術表現を「芸術的知性」による思考と位置づけることで、美術および美術教育を批判的に検討し、再指定することを目的とする。

こんにち、拡張を続ける芸術現象と美術科教育において、共通する芸術概念は示されていない。そのような状況は、芸術、美術教育の実践や議論において大きな障壁となっている。

序章では、研究の目的と方法を示した。芸術とはわたしたちにとって必要なものだろうか。芸術作品の鑑賞や制作をなぜわたしたちは続けるのだろうか。美術教育が公教育で必須とされる根拠とは何だろうか。そのような素朴な問いに答えるために、わたしたちは芸術に関して原理的なレベルで思考する必要がある。

第1章では、思考-世界のありようを二つの布、織物とフェルトとして思考した。織物は条里空間、王道科学であり、フェルトは平滑空間、マイナー科学である。わたしたちはそれらを〈科学的知性〉と〈芸術的知性〉と名付けた。

第2章では、領土の外に広がるカオスに抵抗するために、領土化の歌、リトルネロを歌うこと、そしてそれをひとつの芸術であることを指摘した。リトルネロは調和と秩序の力＝ムーサの力を要請する。ムーサのリトルネロは詐術としての力も持ち、わたしたちを支配するものでもあった。それは王道科学と密約を結んでいる。

第3章では、その支配から逃れる力として、脱領土化としてのセイレーンのリトルネロを描き出した。セイレーンはムーサの娘としてその力を引き継ぎながらも、その秩序だった調性から逃れる力を有しているが故に怪物として描かれていた。ムーサは記憶を王道科学に引き渡すことで国家形成の神話化に加担し、セイレーンはそこからこぼれ落ちるすべての記憶を想起させようと試み続ける。

セイレーンがリトルネロを歌いだす契機を二重の親類性による「芸術の論理」にみた。また、セイレーンのリトルネロとしての芸術はわたしたちに謎を問いかけるが、それが問いとなるのはセイレーンと王道科学との密約によってである。その問いは暗闇のなかに向かい、わたしたちの思考の極限に目を向けさせるのである。

第4章では、「芸術の論理」は「夢の論理」と類似するものであり、それはフェルト状の布を作り出し、私はフェルトのヴェールに包まれることで夢を見て、また夢を見ることでヴェールを作ることを描き出す。夢はヴェールの内で、ヴェールと共に見られる「〈ヴェールによる覆い－覆いの剥奪〉なき出来事の思考」である。ヴェールは芸術＝〈まったき他者〉の到来のための場である。

また、ヴェールは形象であると同時に物質＝事柄であるということを指摘する。芸術作品は終着点・目的

地へと至ることで完成するのではなく、「まったき他者」＝芸術の到来をもって「フィックス」するのである。観る者はそこでモノとつくり手とイメージとが絡み合ったフェルトの抵抗に出会う。それは非同一性の経験であり、鑑賞者はそこで自らのフェルトを作り、それに包まれ夢見るように思考するだろう。

終章では、それまでの思考を踏まえ、美術教育を〈芸術的知性〉の教育として再措定する。美術教育をムーサのリトルネロの教育と考えれば、「無限に実験を繰り返して自分を作り上げること」としての陶冶としての教育であると言える。そこで重要なことは、子供たち自身がカオスとしての「自然」に触れ、その危機的な状況においてリトルネロを歌うという経験である

だが、ムーサのリトルネロは過去と未来、わたしたちの存在を一つの消失点に収斂させることにも通じる。また共有された領土は、領土の内に子供たちを閉じ込め為政者の詐術と文化産業的な享楽に陥らせてしまうことに繋がる。そこで、ムーサのリトルネロの力に対抗できるものとしてのセイレーンのリトルネロが公教育で行われる必要性を指摘することができる。セイレーンのリトルネロによる脱領土化の経験は、芸術作品の内に自然美を見出す経験であり、翻ってわたしたち自身の内に、また世界の内にカオスとしての自然を認めるまなざしの経験となる。

また、美術表現を造形言語によるものと位置づけ、それを日常言語としての「合理的論理的言語」と芸術言語としての「詩的言語」の使用法を指摘し、〈芸術的知性〉の教育を「詩的言語」の教育として位置づける。

〈芸術的知性〉としての美術教育はムーサのリトルネロとセイレーンのリトルネロという二つの矛盾の間で引き裂かれそうになりつつ、あるいはどちらかに矮小化される危険性に曝されつつも、その間で留まり続けようとするしかない。この矛盾を含み、解決されることのない事柄、一義的にはっきりとした位置と意味を持つことができないということ自体が芸術の性質なのであり、それを思考し実践し続けることができるものこそが、芸術的知性であると言える。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、現今の芸術現象と美術科教育との間に共通の芸術概念が示されていないことが、美術教育の実践や議論に大きな障壁になっているという問題意識から、芸術表現を「芸術的知性」による思考と位置づけて、美術教育の再措定を試みているものである。

その研究方法は、ドゥルーズ、ガタリなどのポスト構造主義の思想やアドルノ、デリダ、グラッシなどの思想をただ援用するのではなく「共に思考をめぐらせる」という立場で論を展開しているところに特徴がある。

審査委員会は本論文に対して主に次の3点を高く評価した。

第1は、「芸術的知性」の内容と構造を、「科学的知性」と比較し、織物とフェルトの特徴的相違をもとに導き出し、事物と形象の間、形象と形象の間でそれぞれが親類性で結ばれるという二重の親類性をもつ「芸術の論理」の重要性を指摘した点である。

第2は、「芸術の論理」は「夢の論理」と類似関係があると指摘し、「ヴェールと共に思考」している芸術は「〈まったき他者〉の到来のための場」であることを明らかにした点である。

第3は、導き出された「芸術的知性」の観点から美術教育の再措定を試みた点である。芸術の任務として、「真理と美を絢交ぜにすること」が、教育の目的である「世界＝自己の形成」となることを指摘し、「子供をカオスとしての自然から疎外してはならない」と子どもの表現活動の本質を指摘しているところは一つの成果である。

本論文は、公教育における美術教育の役割と意義を根源的なレベルに立って思索をめぐらせて論が展開されており、非常に意欲的なものとしてこの分野の研究に一つの問題提起をなし貢献するものであると審査委員会は評価した。

当初、本論文は、なるべく説明文や註を控え、比喩や韻文をまじえた文章によって一つの芸術作品をめざすという形で論述されていたが、理解しにくいという審査委員会の指摘を受けて、申請者は適切な修正をおこなって完成した。

最終審査委員会に先立って開催された論文の公開発表会では、他大学の専門家も参加し、それぞれの質問に対し申請者の応答は満足すべきものであった。

以上のことから、審査委員会は、本論文が課程博士論文の水準に十分に達しているものと全員一致で判定した。

(作品審査結果の要旨)

本作展示会場に入ると真っ先に戸惑いを感じた。まず視界に飛び込んでくる木製構造体は裏側を鑑賞者に見せているようで、舞台裏の大道具を想起させる。さらに表側に回り込んで見ても、強烈なLED照明光により視界を阻まれる。一体どこを見ていいのか。傍らには数十枚の写真や資料の断片が額装された状態で2点、こちらも仮設的に展示されているかのように水平に置かれている。鑑賞者を困惑させることが作者の意図なのではないかとすら初見では感じられた。

しかし、壁面に提示されているテキストを読んで、「フルビネクの声帯」と「曾祖父の眼球」という2つの物語が動機であり、これらが折り重なった多層構造になっていることを理解すると、この作品を取り巻く世界観は一変した。

《「フルビネクの声帯」 フルビネクはアウシュビッツ強制収容所で生まれ、育ち、亡くなった3歳の子ども
の名前。この奇妙な名前は時々発している意味不明のつぶやきを他者がそのように聞き取ったのだという。
誰もが教えてくれなかったので話すことができない言葉、その言葉への渴望から発せられる声。》

《「曾祖父の眼球」 1918年冬、作者の曾祖父は第一次大戦シベリア出兵に召集され、地平線の先まで広がり
続ける雪の強い光に目を灼かれ、両眼球を失い帰国した。》

強烈な光を放つこの木製構造体には平面作品が隠されている。基底層はルーベンス作「キリスト降架」の画像を出力したもの。しかしそのイメージは流し込まれた樹脂の層で封印され、光を反射し、判然としな
い。最前面のレイヤーには作者自身が目隠しをして手に油絵の具をつけて擦りつけていった痕跡がのたう
つ。また、水平に置かれた2枚の額は「曾祖父」と「フルビネク」のスクラップ資料あるいはコラージュであ
る。これらは壁に頼ることなく自立する絵画であり、壁の権威から離れた絵画だとも言える。そして、この
想像を絶する二つの悲劇を救済するためのものとして、また歴史には残らない彼らの存在を記憶するための
ものとして、制作されたものと言える。審査員全員の共感を持って評価され、博士号の取得に値するとい
う全員の一致をもって合格とした。

(総合審査結果の要旨)

博士学位申請論文、「芸術的知性-美術教育の再措定」は芸術表現を芸術的知性による思考、と位置づけ、
美術教育の再措定を試み、論考を進めて行ったものである。

王道科学への批判・検証という視点を交えて行われた本論の骨子は、芸術的知性の内容と構造を『科学的
知性』と比較し、織物とフェルトにたとえを求めて芸術の論理の重要性を指摘している。「夢の論理」と
「芸術の論理」における類似関係を指摘し、「ヴェールと共に思考」している芸術は「<まったき他者>
の到来の為の場」であることを明らかにした。そして、そこから導き出された「芸術的知性」の観点から美術
教育の再措定を試みている。

非常に詩的な表現にこだわるあまりに、他者に対して非常に理解しづらい文言になることについて、審査
委員会の指摘により適切な修正を行って完成されたことを踏まえ、本論文は課程博士論文として十分に水準
に達しているものとして、審査員全員の一致で合格とした。

博士審査展提出作品：「フルビネクの声帯/曾祖父の眼球」は複数のパネルの組み合わせと、LEDによる照

明を用いた意欲的、かつ巨大な作品の姿となったものである。学位申請論文と同様、文脈を抑えていない鑑賞者にとっては非常にわかりにくい形態を採っているところが特徴であるが、作者の考える言語や自身の出自に関わるストーリーテリングの文脈に依拠するところのコンセプトを考えるに必然的な作品構成となっていることが読み取れる。歴史の中に埋もれて逝った者たちへのオマージュ、とも読み解ける本作品は、本学で研究を重ねてきた作者の現時点での集大成として、その規模や意欲も考えあわせ、審査員全員の評価の一致を見て、合格とした。